



室町殿日記

三
九八七

リ 5
6431
2 止



門 45
號 6431
卷 2

早稲田 大塚 備前
25.6.19
藤 赤

室田殿日記卷第七

今里之城夜討之事

室田殿

永禄七年

一生田隼人仇赤松方入道内藤権左衛門勘次郎

今里の要害夜討より敵目と見^{モテ}せしむる評義一同と
都合武士の士卒と追々三月六日の夜よりしりしと輪返り
押寄先人打と千五百の城の後二町計ありしとめ五百の足輕
と内藤権左衛門と堀瀬若狭守兩將打具して大午門降し押
寄焼草と積上火を付たりと猛火東西ともしり城中と
しりさよと下返りしり敵ハ防りしりて先火を消さ
し度と見んとしりけりしりて夫余の上より氷雪足
のしり運ひしりせりしり消されしりまされしり堀の^{ツライ}後し
しりしりしりしりしり細川又ら高湯本原

古 命 田 新
恒 田 新

と有るは所は皆落るまじしものなり。い軍姑に己城と破らる
るを固くおしなすあり。三百餘人とあき人呼ぶ申されきつひ
の者達つこの後のまゝにしてゆふがうしは在表巻の形半あり
つゝすうしーさんれんく百姓等兼てまゝありて都て給ふ
しけきハ我り知し意して我云はるゝあつらうて都て宮へハす
しるゝと仰るはひてしゆしなひてしゆしなひてしゆしなひてしゆ
あしゝく出て或者ハ出まへし或是らうと者ハ許券し竹の徳
振ふ紙切きて小旗をさる度きまゝと云のちりて振るれば時
の向ふ三百の中そお多しける助解ゆたし門悦て者たし門具
敵のまのまにさしもろつとのちと人おとししとまのあて大旗
小旗ひらへて勢と傳へしうしとてしゆしとてしゆしとてしゆし
もとる守て切は城の傍法の人おとしとてしゆしとてしゆしとてしゆし
有え

あや〜〜こも城守の者た〜あはよりのみまられてハ大事成
へ〜たあ〜〜人おとししとてしゆしとてしゆしとてしゆしとてしゆし
とそ退はるるこれ〜助解ゆたし門悦て者たし門具
とまてそしゆしとてしゆしとてしゆしとてしゆしとてしゆし
つゝとてしゆしとてしゆしとてしゆしとてしゆしとてしゆし
たりあかある候や誰城ハ人敵はあつらうて都て宮へハす
まらとてしゆしとてしゆしとてしゆしとてしゆしとてしゆし
百半陣取らう助解ゆたし門悦て者たし門具
敵とひわつさん〜あつらうて都て宮へハす
てしゆしとてしゆしとてしゆしとてしゆしとてしゆし
侍は様迎ひたし有るは〜あつらうて都て宮へハす
常城と率の命とまらつら〜あつらうて都て宮へハす

へんくし入をくさあしく對面しんくしとて御解由と城へ召れ
御着候の限りせれり高申頼しんくしとて城へ留め候
相成言も人始終書留しり遣しり候て大い候て不意の行
り候て候と退り候て候て候て候て候て候て候て候て候
候人の書状洋進子

去し三月三日の夜半に敵三千余し人殺し八重二重取
圍大平門に燒草して多勢二ノ本戸を青入いし城主御
は比方りゆふ刻としの家老凡五千人會り於多勢切取り
勝負一時交せし給膏刻し城老中歴々討死敵軍
手負散り亂れ被申候降然敵極勢しし美年し入替候
如何なるか新村に中一時罷有室人死不心候行
信多勢恐而陣し門取候多し口取り可易心候候更

其ゆふ候し向進有番備下り付候し候し敵不討御被
為候し候し

三月九日

敵長

上野氏より捕食
もつ士 表化守候

城に討死のし候多有る中より、存原友兵衛討死有るも
妻女照屋監物の息女あり候とて、其村は陣の方より京へ送
らるる候

當三月三日の夜半に敵以多勢要害へ取捨二ノ本戸を攻入
候に、村家中より老若悉く切し、命を於於膏を盡し候に、依り
或は討死或は命死し仕合中候し、甲し、其の度の中候

藤原藤基末流下らむ討死し高名人年月ヲ經水訖
又四方京へより度中被申之計而則送り届しよ毒田ふ
直ニ身守可なりと云く向不徳伴惟之存後々

三月十一日

安村江作

保志

服屋惣務殿

又又甲のりら女房の事候也さしけらるる斗りる方よと申て
京の檢新所長高所へ来て訴候申作りて云川橋村出合々
何事より惟りんとしうんたれと被ふは馬川もきつてし者書
ひきりてんを月ち日斗にまき余今里へ被泰人兼し當月城
中の侍達悉く討死被成ら由由候は侍、執事又もき活今日至
死生曾而不兼無句え存下り而身申度らぬ女八城

へ置停止の中兼とてまきも不叶らる御前よりと云ら
らまらんとぬし兼、為よもと泰りし、長高因給ひと
それこそ平負討死のうら、當御所申の所縁計具記し
此家のま、即命斗書被毒知し知不申ら女八級停止惟は
果状と違しはしん終下りて直く被り身と被りたれは
うと計し、任を奉り惟りんと云存の、もとて物々徳由れ
らる女房院濤代の男二人女一人具して推し者と申具て下
けり、桐番の者候、即りまて、子細あり城へ入當番の、長
高の物と泰りて、馬川の、物と為りて、安村の家老出
合て洞とあり、初は、まき、討の事、子と、惟武、馬川、合、二
の本、中、討死、ま、惟、武、の、ま、つ、羽、ま、戦、場、を、相、果
ハ、守、之、の、事、よ、と、て、終、の、中、の、候、り、ま、若、く、ま、若、く、む、り、ま、り、

甲午井有富和勝

一 甲午年の軍は美田のくく成切とくくたて威とささくく入
り年と進て四方ハ七降人となり飛前もいさ方一月と進て威
勢をくく切てくくあくく身もて終くく元くくくくくくくく
くくくくくく初元の甲午井有富と庫の書院所の初元た
くくくく初長方へ和勝の書とくく入る再三くくくくくくく
てくく別人質とくく一義長甲午井有富對面有くく向はま
入魂有くく金金比くく契保とくく

永祿七年比

飛前守加持田甚三衛と進佛交

一 泉兵備常入通、領分一為くく方へ初元入ありくくく
田甚三衛より人々と京より代官、被作付てくくくくくく
罷有くくく熱くくくは義長は在る所々へ札と遣くくける

一 備前入通、伊勢守等、領分一切當年上納不可有富
比くくく同くくくく申遣作着被令上納とくく二重くく申付
作内具了如此准とくく

十月二日

義長

一 初左は女惣中

如右向りのものくくく細くくくくく百程中らくくの中
くくく大くくく飛前守へ以後者くくくくくくくくくく
と押給くくくくと集りんとくくくくくく義長はる人むと遣
甚共備と理不盡くくくくくく飛前と進出くくく力あり加物
田ハ高く進くくくくへは高と申上り義輝も同右くく諸君と
平くくく義くくくくくく被作出くくくくくく未被申けるは
義長泉兵と整くく申くくくく終くくく伊元元三准子熱くくく依て

龍牛某定入通の端と望作事ハ全平の破心よの作り
軍功の輩々如行物作りのみま度と申上りては終つた
かしく中絶へた納りたる所は當年よりい方へ清諸侯未
りともを証戦切と事りたるは甚き衛と誓してはいり
具は物作達と同可給ととも納りたる事細推して同所
給ひては中絶とてま給ひたる。

三方領と義長押元事

一 近年松河内ありて亡失の者なき知行の比過半より
上納りたる所より下代とて入るるは然りと義長守心誓の中
より人おとるた違て所々の奉行下代等と進まけりて
義長よりも事と改下代と入るるは然りとて百餘方
より事行くとて長高方へ申ける當秋の百餘義長へ相納り

右の

との事より下代を改め義長よりよりすべしと向ふ
りより中と新征より長高同給ひては然り方へ
なりより奉りてはゆき義輝公同とて富山三尾山三
百餘人納り相納りて名高守兩國より下りて義長の置替り
下代はと進ま直物納り内は汝ありて守備はとて作
三尾山の義と天晴大夏アツカシの奉行式とてなすは沖意を
力なり三百余と門具して下りたる相在りの存官人と呼
て直物納りしと下代義長とて進まけりて下代中より又
義長より買ける下代方へつて義長より下代中より又
義長守へて種のは牙といとて何れも義長同とて義あり
よ使三尾山とて進拂とて小造共未尉佐藤角多と二人二百
のくむと相納りて名高守と進拂異儀とてなりて義討果

せとて下知しける長く西の村へ早ひひえ以後者三左衛門
へ申りける長慶入道侍と蒙る小造共未尉と者罷向け何
島山殿と申る兼人早く京邸へ申りける可物吾給く進ま
りせよの作よ成公百余の人殺と給く申すもへ馳向ひ惟と云
るもく三左衛門因て沖物と申す内ハもく逗留し振籍仕
輩存く^{シテ}新てハ申物と申すの申すもと蒙罷下作早くと
方退給ひて可物と申すも申すも小造因て何案の申すハのちんと
て島山と有るる益宗菴の島山と申すも重く取巻て後地と
三十挺計寺面と申すも申すも任持人と速思して島山と云け
るハ一徳の沖物ハ因て申すも申すも多勢とて攻
らるるハ益宗菴一た申すも申すも申すも申すも申すも申すも
各討死し給り申すも申すも申すも申すも申すも申すも申すも

取らるるを給ひて申すも申すも申すも申すも申すも申すも申すも
他も申すも申すも申すも申すも申すも申すも申すも申すも申すも
それとて僧道悦と申すも申すも申すも申すも申すも申すも申すも
伊東門と申すも申すも申すも申すも申すも申すも申すも申すも
申すも申すも申すも申すも申すも申すも申すも申すも申すも
申すも申すも申すも申すも申すも申すも申すも申すも申すも

島山殿侍の事

は後高御門晴光
天文十三年
長慶侍
ミトヲカシ

のひ身とありの申すも申すも申すも申すも申すも申すも申すも
申すも申すも申すも申すも申すも申すも申すも申すも申すも
各兼く軍の許義とて細川武敏も晴光と申すも申すも申すも申すも
下山崎西也洛中の侍と申すも申すも申すも申すも申すも申すも申すも

而して今度より助かりて危くおひてこれと遣はしんと
く妙くも兵隊は倍ちこれし勝利とゆふこそち慶に
とたふ兵隊は倍ちこれし勝利とゆふこそち慶に
有るなりと申す家老はの子共一なる智ありて死し
の人数は百廿余人と申すは倍ちこれし勝利とゆふ
以ては倍ちこれし勝利とゆふこそち慶に
あつたなり城を奪はしと申すは倍ちこれし勝利とゆふ
馳付しと二百三百の軍勢と申すは倍ちこれし勝利とゆふ
へしと申すは倍ちこれし勝利とゆふこそち慶に
らんと評義を夜區々として一足と申すは倍ちこれし勝利とゆふ

室町殿日記巻第七終

室町殿日記巻第八

永禄七年比

仍く本貞頼へ沖使者被遣す

一 去行て義輝云如何と申すは倍ちこれし勝利とゆふ
時老長の長と集給ひて被作さるは倍ちこれし勝利とゆふ
すり事なれと容易謀討しめし味方少もせめて一ヶ國
も領する行の或はと申すは倍ちこれし勝利とゆふ
らびされと申すは倍ちこれし勝利とゆふこそち慶に
しともひきひ故義晴云の時より信心の者なれと今以頼
えれとて飛前と責わぐして置ん事ハ千里の明と虎と
敵すは倍ちこれし勝利とゆふこそち慶に
出され各々是て形少補とばぬへと遣し給ふ行め貞頼
の錦々着しかし家老は母後守出會く奥へ請はるるか

伊身も能くつかう所の義も信く唯今伊身能く或る被
たれど仁木扇も取あつて山上の首級終伴も迷途へも其見
兼を國人等何れも方儀へもてし根ハ信りもも其市よりと
とて各命を於ての事とてさうして累年國と動也作とて
信く義長ハも方儀へハ萬運心の様も取成申し信く我
誅罰の伴と被下交むと信り上ハ今至く意致も其命
序ハ然れハ義長權威と幸し其命と長し主ハ信く運強
年と進て彼もわく大方も失伴し強ハ降人ハ罷成と一味致
年と進て直政其未雌雄と交ハ信く信りもつてさうも方儀
ハ進えとて討年と蒙り信くも利と達し給子ハ兩度と及
軍の取致るぬも方儀やわくもさうも蒙り上ハ直政ハ相儀は
て伊身方と可なりとて被りける仁木扇給ひも伊身方と

ハ直政ハも其對面ハし其のひ方と中をさうして被りける
ハそのハもさうも蒙りもさうして家光と同心もさうして直
政ハ歸へたりける直政致もさうも其のハ所とさうして後罷出
對面すた其電上其の首無御り申せ給へハ直政ハけるハ
あつたれハ信く今女也前も下さればハ父高政とハさうして
りもそのと其義長とて親の敵ハ清とて人ハ明日のやう
もあつて其御りもさうしてハ命と信く義長ハ雌雄と交とんと
信りもさうしてさうしての思もさうして其ハ信く其見御上も
敏服申さうして上ハ諸君ハ命とあげうちて勝負と交へくハ
とて被りける仁木扇給ひも領事の上ハ其儀致致も其方
儀ハ伊身の通とて上誅罰の軍勢向も信り兼日各
ハ蒙り可なりとて直政ハ要事とて其出給ひける

其見直政と方方へ被と違ふ事

安見、亦先極見と云ふ事、と評く、方方のくへ被と認て知、
丁へと被りたる。

熊合、合上候依一昨日、方様、行末、右京也と被下候
る、最、心、付、美、内、く、武、命、と、此、月、奉、意、趣、彼、毛、始
終、之、事、申、渡、候、此、上、八、京、勢、討、年、不、被、下、美、内、ノ
輩、加、勢、之、仕、之、義、長、不、目、退、派、可、任、候、旨、致、契、諾
候、行、末、降、格、被、申、候、内、之、事、申、之、内、之、事、作、尚、替、候、以
座、候、之、重、可、申、候、之、事、

其見入道 信別

十月四日
日友主馬方
其見寺方

兩人毛と被とて大に慌やうと返れと云々

青箱、合、評、見、候、然、と、孫、之、様、子、長、作、之、孫、之、事、白、作
此、上、之、項、武、命、遠、一、戦、作、之、心、強、相、勸、候、之、勝、利、疑、有
同、浦、作、大、慶、奉、之、候、候、調、直、而、言、候、思、之、候、事、

十月四日
日友主馬方
其見寺方

其見寺方

直政、方、方、の、く、へ、事、候

一昨日、方、様、行、末、右、京、也、殿、被、下、候、之、最、前、力、違、心、
之、事、付、之、事、内、之、事、武、命、之、背、奉、意、趣、彼、身、之、事、年、之、始
終、之、事、申、渡、之、事、上、京、際、之、事、向、之、事、又、候、各、加、勢、仕、之、事、
長、一、時、之、事、誅、罰、可、致、中、堅、約、諾、仕、之、事、内、之、事、其、事、意、也

右儀委細と面談し時て一達准及く諒し

十月五日

直致

山中道江守殿

玉葉殿

河白殿

く相見して大いりうらひ別る返翰書し

昔の箱と相見し所の所を成程の兼准の大慶ふ海

右今准の一賜ノ悉ノ深本とらるる委細面談し

上能る

河白殿

十月五日

玉葉殿

赤沢大和守殿

山中道江守殿

江白ノ要害夜討し

明く仁本右京左衛門尉洛して兩人無相遠領堂仁本
細く上るる君と相見して諸老感懐懐の事ありて
勢と被下下して則仁本右京左衛門尉と大将として洛外西國ノ
急も用意被申して其院所の大寺有るる仁本とらるる又
軍勢ハ近邊の山里ノ入置けの初らく軍の許しけり玉葉
佛寺玉葉川藤河白山中寺申されけりハ江白の要害ハ
夜討しとせ敵と軍外しと及夜前、中為人押寄准ハ
中島の軍ハ何所も一石は保く出申准ハ山城とけり
して可成とらるる中と一同に被りしれハあ見直致は
同きまける安見代官ハ堀田与八直致軍代ハ赤沢大
和守与力ノくハ内者河白祐保玉葉玉葉寺生田也

中つて被申けり。

去十月十三日、夜半、高見直政、与力のく、都合に、
以白、城へ押寄、二ノ廊と投入、戦ひ、首級百二十余
討捕申、能、以、三ノ家、老、大、夫、倉、焼、為、申、
埃、多、く、高、五、同、取、破、ら、る、粉、骨、し、勳、誠、不、淺、く、之、逢、着
尾、休、つ、存、の、く、一、方、右、下、作、ら、し、を、申、過、ら、右、年、下、申、上
作、ら、く、ゆ、く

十月十四日

仁右衛門

氏

上野、長、の、下、浦、の、

進士、表、化、号、の、

一、羽、聖、日、殿、長、へ、被、申、け、り、

一、羽、聖、日、一、存、城、中、討、死、千、員、城、ノ、損、勿、と、記、し、て、死、前、方、(遺)

繪、り

熊、以、死、札、令、寫、上、作、の、十、三、方、へ、走、り、敵、度、討、押、寄、申、
惟、京、路、し、檢、使、仁、右、衛、門、檢、見、と、し、て、二、千、計、と、取、圍、
防、之、更、移、骨、を、惟、く、し、て、多、傷、と、申、十、四、五、間、取、破、り、札、入、
二、ノ、亦、戸、口、へ、打、ち、出、射、し、死、ヲ、限、防、于、戦、ノ、遠、惟、く、
鳴、方、ノ、討、死、百、余、千、員、三、十、人、計、出、來、り、敵、討、捕、亦、難、兵、
五、十、余、計、名、の、寄、千、掃、除、之、刻、夫、倉、ヲ、焼、拂、り、過、河、大、
千、向、埃、杯、御、理、申、身、以、向、是、武、百、可、始、く、今、日、中、之、先、也、
聖、惟、く、之、ハ、夜、半、之、名、作、り、余、早、く、可、方、の、戦、ひ、に、臨、み、不、可、
惟、恐、之、存、也、

十月十四日

一、存

飛、前、守、殿

義長被見して大に驚愕し返状せり

書状到来の十日に夜討押寄作らるるに貴
郡の中若守とて止り奉り作らるる人殺し討を殊に
家老れお多討死し中若守申す今年作らるる金焼あり
城ありお被作らるる今日中先継^り堅くられ候はずハ
む氣をたふしく作違守是指紙作らん夜入作に
可なりは通れ候と申述作思はれ

十月十日

義長

一なる

今里の城主替り

一京師より人々を召し被作出さるる今里の城より細川氏
と入置ける頃ハ本年義長と縁邊に成るる中とて急城主

と入替り不承誰の有とせられりて畠山よりされりて
と御座らるるよりたよ右京元より人々を召し被作出
本見の計^{いかり}にて或き住宅をとりて中義長の仁事と今
里の要害(四角の)し可御し候中より上りりて今里
よりありて典厩と豫兵遣しし城へ仁事と入置へ
とて置ひける畠山舎方ノ三高き事と下りて事の
次第とて置ける典厩とこれらりてこれハ今里義長逆心と
作らるる事は何と迷惑あること追り京師へ申すこと
て當城と罷可上り候如御意の上ハ不及子細に豫兵
へハ見たりすこと被作付らるる京師へ先づりしこと上
ての下向りの事と申す被作付らるる事と申すこと何と
不承人を作し候こと今一左右の國を可御らんと被

たれて如何極くしうま極くつ斗ひし可ぬらんつんた
ふ牙にゆく向め春くす中契諾して返りしうね極路して
る方へ敵奉りたれしん京師へのりすまより補作出に付て
ひるんと申遣し給へて典厩を年連へる女と義長方(を遣
られきり)義長身をもと清ぬてむわうこそ有るれして何の
遺恨もあらうりたり相御川はとて城を改めて仁事と入替り
給へ人教儀五百成しうと毒見直政ゆめて兩人とせ五百
人加替といきお合ひ千のく教してわへらねきりわく仁事入
替り給へて義長身も也辺の城へ(入替り)入替りの城へも三
好所拜を又と相保して回心二百人加ひける。石水主水正重
害福徳の城へ(岩成)主行今(或百)の回心と付て入替り
きりし外(人)買あしと改(名)名(の)とて(と)たて(と)て(と)る

細川典厩極路し中

藤原紀

ら方(つ)身有る(と)事有る(と)典厩(と)石(の)り(を)給(つ)ね(り)京(を)
し(れ)ハ(義)種(云) 義長(の)謀(殺)仕(り)事(ハ)所(々)の(城)主(從)類(眷)
屬(忠)賞(乞)し(て)信(と)各(恨)と(長)慶(了)残(入)り(被)等(の)
あり(亡)失(の)輩(の)領(分)と(押)て(取)引(補)ち(ん)の(中)か(し)と(る)
と(と)こ(ら)う(と)と(暫)了(簡)よ(る)事(有)る(と)態(と)相(し)ぬ(と)早(速)法
方(と)押(領)を(し)信(て)謀(討)す(と)と(一)定(と)て(討)手(と)遣(ス)ぬ
知(く)給(と)と(折)め(た)れて(罷)返(り)ぬ(と)割(津)邊(ハ)今(里)の(要)
害(と)て(兩)度(の)軍(知)の(事)ハ(有)り(あ)る(と)つ(て)餘(所)ハ(見)ける
中(ん)ま(の)あ(の)の(の)ゆ(後)か(り)典(厩)者(と)被(り)たる(ハ)内(に)
あ(ら)う(と)な(と)と(義)長(の)妹(と)嫁(と)奉(り)を(し)ぬ(と)用(の)あ(ら)う(と)ら
法(施)者(侍)は(も)五(十)斗(遠)侍(の)着(次)し(居)而(と)是(申)仕(と)く

多年置りし尾上城と捨くも相傳の至君の
要りて能く打立し懸橋と云く出へる催とはりんと
は者ともや飛龍と告りして討平と遣り候へん事必定こ
たてて戦場の沖用と云くしてよりつれ所相果るとなる
と内して千度百度とあてし罷有る事唯今此山前
と云ふはもと日平の神祇御懸候と云ひて候へし事
返上被りしより三方岡に実を候と云く候へん事
戦場にはあり先中へ吹く事候と云く音信はりの細川
と云く候へん事人々飛龍内へ候り候と云く候へん事
所へ候ると云く候へし昼夜出入の用所と云く候へん事
義長の内澄京方へも通さずと云く候へん事
つれ候へし候へしと云く候へしと云く候へしと云く候へし

方家妻女の義長の同腹の事と云く候へん事
つれ候へし候へしと云く候へしと云く候へしと云く候へし
角へ候へし候へしと云く候へしと云く候へしと云く候へし
儀飾と果愚案を加へ候へしと云く候へしと云く候へし
方の會候候へしと云く候へしと云く候へしと云く候へし
出候へしと云く候へしと云く候へしと云く候へしと云く候へし
と云く候へしと云く候へしと云く候へしと云く候へしと云く候へし
心替方へ候へしと云く候へしと云く候へしと云く候へしと云く候へし
かへ心身と書る時と云く候へしと云く候へしと云く候へしと云く候へし
初と云く候へしと云く候へしと云く候へしと云く候へしと云く候へし
あへ罷下候へしと云く候へしと云く候へしと云く候へしと云く候へし
たつ候へしと云く候へしと云く候へしと云く候へしと云く候へし

まゝく後入つて下りけり

永禄五年
二月

杉永主殿寮物具おさめり申

洛東の破谷をたむるをあらうりもよるに置甲の七両買より
きれハ別具を置流流をまより持ててのりたるのりたる杉
流より杉永主殿寮家中より高見堂の流もよるをあら
くよいも長徒の中より道具を何れもよるに同載料
固てよりも推す着用のたぐひもよるに申着用の何れ
らんとも押留めりけりらんもよるに物具をよるに思
てもハ誰人の方へ奉りてよるにはよるにのりもよるに
有のまゝも申具をよるに習ひ方よるに申して押入の載料
の傳を命あつての事よるに何れもよるに誰人よるに改
被成り成置流の固てのりたる主殿の流もよるにのり
被成り成置流の固てのりたる主殿の流もよるにのり

と改申推し有り度より三好長兼の方へ申さるへとて申
向より荷ありせ我流へ入るもよるに力及び流路にてのり
流りたれと破谷をよるに長高方へつてよるにのりもよるに
く改申

田々所存知義長連心、依り諸事一京邸へ通流
更ニ改申推し、武具もよるに申して押入もよるに長慶
力もよるに京邸へも通流もよるに同のりもよるに遣ハ曹テ罷
成推りてよるに

十二月

桶村長高

破谷を列敷

杉永より流をよるに申して主殿の流へもよるに杉永長
慶方へ申してよるに流もよるにのりもよるにのりもよるに

ついで北領と通ひたり

義長京邸へ移住と遣りし事

永禄八年三月下旬の比義長相傳の者、林之丞と云ふ事
しこくした男あり、彼とひそく、呼て京邸へより御所中の様と
毒頭、宗人へしつゝ、まゝと辭うらん、乃帝の方へ告奉れと、旅
料、山よりとて、まゝとて、しつゝ、京邸へ、着て、七条朱蓮の
あつり、まゝとて、た者乃存多れ、是、し、宿をぬて、毎日、三音、様
と、寢け、行、昨日、今日と、折暮て、五月下旬、成、まゝ、時、あり、
月、面、は、まゝとて、御所中、も、つゝ、まゝとて、都へ、つれ、くの、乃、柄、を、ん、ハ、
沙、遊、具、の、まゝとて、暮、まゝとて、給、て、行、く、る、を、又、中、あ、り、下、て、い、
具、は、信、を、れ、し、つゝ、まゝとて、地、言、す、く、い、ま、ま、とて、ま、ね、水、彈、正、十、河
一、百、入、通、三、お、修、理、大、丈、右、成、主、信、長、と、い、ま、ま、とて、呼、ま、け、り、ハ

任、有、石、京、色、諸、方、の、説、と、手、し、付、今、里、の、城、へ、入、り、入、通、と、説
よ、終、つ、る、果、竹、つ、わ、り、討、つ、め、へ、し、ま、ま、とて、ゆ、さ、達、と、命、有、り
し、ま、ま、とて、累、年、の、方、の、為、命、と、於、て、各、若、戦、と、な、り、て、果、意、
は、死、と、給、り、ん、ま、誠、と、は、信、び、身、も、し、つ、ま、ま、とて、い、ま、ま、とて、
中、つ、つ、ま、ま、とて、何、の、ま、ま、とて、何、の、ま、ま、とて、何、の、ま、ま、とて、
し、ま、ま、とて、年、來、の、勢、情、と、都、を、ん、と、ま、ま、とて、各、と、始、て、水、
田、向、り、同、う、般、分、主、水、正、打、て、よ、り、へ、果、ハ、以、城、に、殘、り、
し、可、守、各、各、居、城、と、家、老、等、と、殘、り、城、中、に、あ、る、勢、と、ま、ま、とて、
果、て、つ、ま、ま、とて、ま、ま、とて、各、各、ま、ま、とて、一、同、と、ま、ま、とて、
し、ま、ま、とて、高、氏、様、を、し、ま、ま、とて、有、の、へ、し、ま、ま、とて、五、十、三、十、
ま、ま、とて、伏、見、の、様、渡、り、御、所、向、長、河、原、御、所、あり、ま、ま、とて、
つ、ま、ま、とて、あ、り、ま、ま、とて、五、月、五、日、の、夜、子、半、に、
つ、ま、ま、とて、あ、り、ま、ま、とて、五、月、五、日、の、夜、子、半、に、
つ、ま、ま、とて、あ、り、ま、ま、とて、五、月、五、日、の、夜、子、半、に、

ふんこの沙の言と聞石今心奪として沙着背とのびを給
ひく而も向を給ひ最期に観念たりし事也

しや今れまゝとも言の葉とわらうまゝとひあつて
三十歳と彼の言ふ、わら沙服十文子、切給ひて永禄八年
五月十九天の朝の病とて消るを給ひ沙屋敷の行も悲し
君すてしや自害たりし事也日比中情ありしに中ふの譚
代乃同明歴く二十余人中同少者三十人といひくしや自害したり
殿くしやうり樓閣一時に燃上りて洛中くわらわくしや下京
しやるる同長しのみきし給ひしやうりしやうりしやうりしやうり
奥の石原屋敷より掛付られしに長崎の謀叛と聞てくれしめ
つらゆらうり御所の辺きししや馬人千原氏門出して安しこ
しやうりしやうりしやうりしやうりしやうりしやうりしやうりしやうり

夜て己し明きし在家し諸番押込く未設と奪取馬人を
まをすし返着し監妨狼藉限りか御禁庭し昨夜難後天
地打返守極し止事たり馬人馳遠狼烟天と探りしに諸御
周上人大きし給ひしに北の方若君ありしと東南西北へ思ひ
し給ひしに帝しもたしを給ひしに給ひしに給ひしに給ひしに
えししに給ひしに給ひしに給ひしに給ひしに給ひしに給ひしに
給ひしに給ひしに給ひしに給ひしに給ひしに給ひしに給ひしに
りしに給ひしに給ひしに給ひしに給ひしに給ひしに給ひしに
も武士需達或道しして會合欲ししに給ひしに給ひしに給ひしに
しに給ひしに給ひしに給ひしに給ひしに給ひしに給ひしに給ひしに
侍に防さ夫射ししに給ひしに給ひしに給ひしに給ひしに給ひしに
甚あつ居報ししに給ひしに給ひしに給ひしに給ひしに給ひしに

頼朝御遺骸ハ十河孫次郎ニ申合儀而今兩日中蓋々可
申能向と成者く可成極、後命儀も可成儀と云々

五月廿日

義長

吳岸々々

御印を交々

彈正少將

一なる先

頼朝方のゆくりとては、敵と成ゆつて、さういふ南都の門は、是
度、北山、麻葉院殿、西人、さういふ御出家、ゆつと、いふ
二三人、中、一人、還俗、わつと、さういふ、まゝと、ゆつと、
の世、ながう、さういふ、北山殿と、京へ、さういふ、
を、さういふ、謀、奉へ、頼朝、南都、さういふ、

是ハ、さういふ、若、さういふ、所の、衆徒、さういふ、
手、書、の、は、何、さういふ、手、と、さういふ、
京、の、の、身、と、同、給、の、中、さういふ、
奉、の、の、手、遣、と、さういふ、評、

一麻葉院殿奉討事 信長近しく同僚之思々々

三の、の、山、の、
上、京、の、川、に、在、る、
常、世、の、

室町殿日記卷第九

長慶南都と為給入事

長慶入道斗略とありしころ北家を連く奉りて
 分りてハ推置し給ひて出給あり。取詮人にて呼のせ奉
 りしころハ上野氏部大輔と長恩共部を捕藤孝兩人と尋出
 て申るハ新年の遠隔の儀と云ふと也。奉ん今ハも長慶
 一人残り給ふいと助言ありあり誠と仰を仰りて眼と
 入るると云ふと。其の節成給り人言と云ふと。されハ人
 と遣して一時ハ言奉んハ。いふと。有る人々もあれと。あつて諸方
 の方より仰し成つと。然るも兩人を礼入の同滞トモと申連く奉りて京
 邸人などより仰給して。いふと。又大方の忠告仰と。有る人々と
 相りて。兩人同給ひて申されき。ハ。毒細兼扇は倭は君ハ

く各町川の東みまの辺に陣をとりて後、相水川の口より
一町計川のけりて備を立止るの未明、川を隔て、後施軍と称け
る相水と双方お争ひけり、さう後施を退て、相水と時と二十三日
宛出て、進の負のちりのひけりて、未の前下より、時直是つ
向ふて、の年、陣をとりて、薩兵とわかれて、物具も、さうりつれと
も、相水と人おとと奉り、さう、翌日の相水昨日の如く、陣をとり
川を隔て、敵と相待り、敵、相水、さう、嶺の尻より、
さう、さう、押入川の東、陣を給へ、十、全、傍、陣、所、を、陣
とありて、一、陣、と、さう、何の、さう、さう、さう、さう、さう、さう、
川、中、へ、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、
備とありて、後、と、入、と、い、十、全、傍、と、三、百、の、人、お、と、さう、さう、さう、
さう、さう、さう、さう、さう、さう、さう、さう、さう、さう、さう、さう、
さう、さう、さう、さう、さう、さう、さう、さう、さう、さう、さう、さう、

馬、陣、と、さう、進、の、負、の、戦、け、り、さう、時、計、者、あ、ひ、け、り、さう、半、負、死
人、お、多、出、来、人、馬、は、お、れ、れ、れ、れ、れ、れ、れ、れ、れ、れ、れ、れ、れ、れ、れ、れ、
途、へ、さ、合、け、り、の、さう、さう、さう、さう、さう、さう、さう、さう、さう、さう、
さう、さう、さう、さう、さう、さう、さう、さう、さう、さう、さう、さう、
正、も、と、さう、備、と、さう、後、者、の、勢、と、待、り、さう、如、實、守、三、百、余、い
さう、さう、さう、川、中、へ、進、込、敵、の、陣、へ、さう、二、三、三、の、責、め、の、さう、相、水、の、勝
併、易、と、何、の、さう、さう、と、お、れ、り、さう、さう、解、り、新、と、魚、三、百、の、田、より
五、十、余、人、勝、つ、一、又、字、の、向、を、と、さう、さう、入、て、突、か、り、さう、さう、さう、さう、
さう、さう、一、町、計、崩、れ、り、殘、り、二、百、の、十、余、人、入、り、さう、さう、さう、さう、
さう、さう、さう、攻、め、る、相、水、の、勢、と、さう、陣、は、陣、の、さう、さう、さう、
す、陣、正、の、陣、へ、ハ、後、者、の、勢、と、さう、面、を、據、り、突、か、り、さう、陣、内
は、さう、崩、れ、さう、さう、さう、さう、さう、さう、さう、さう、さう、さう、さう、
さう、さう、さう、さう、さう、さう、さう、さう、さう、さう、さう、さう、

余人は城と身とをとりて水もとてはあつぬまゝと云
をり

諸寺の領改^元更

此寺の方より一城よりして塔中の諸寺の年より一
より討らるる寺領を改^元更ける

一乃々儀の年より被^元寺領所今以相遠有る
候具^元礼各相為作而明白可省金城儀以上

三月三日

久考

諸寺中

上下京より有る寺領所不残御刻と懐中して金城
まける彈正對面して委印より後よりこれよりハ
筑前

中よりは信と各と招り大長に修りんつれと懐中
而明日より揚衣へ被^元下仕とを奉りてこれを重て長
の刻とそれし不修とを被^元けり信達をてより各
用意して中より被^元下りる長慶へかゝる奉りて被^元申
對面して見ゆ今以^元寺細有る候と申して重て入道
一礼と出されこれ各安候とて由縁被^元致^元けり

七ヶ所の沖領分と改^元更

此方の沖領所七ヶ所と改^元更は向と方へ刻より
族所より多りけり近出して進敷より遠者多り
大長傳を命^元切死^元事

西宮東村より此方累代のめより大長傳を
伊所滅との後つる人々所より新^元年念^元比^元成^元加^元る

春西蜀、有るれ、故より、暫時隠住し、然と今度
来出、長慶方へ、をたれ、茂氏、石、破、上、是、の、仲
西へ、下、二十、の、是、師、と、う、そ、へ、て、討、ま、し、ま、向、れ、る、武
乃、師、の、是、の、所、行、向、て、も、よ、大、森、殿、わ、り、る、中、来、て、近、
西、人、森、の、い、ろ、く、し、出、る、の、く、し、大、森、殿、より、も、く
是、情、を、す、て、ま、向、ひ、て、申、さ、れ、け、る、果、つ、く、入、居、れ、ゆ、に、
長慶、身、り、ま、れ、作、早、く、出、を、給、へ、と、傳、七、命、因、て、果、入
道、入、参、り、て、何、の、用、も、作、り、又、可、し、事、も、あ、ら、れ、と、参、り、
し、ゆ、に、云、西、人、因、り、も、方、く、こ、そ、る、を、作、り、め、茂、前、守、の、身
り、半、も、有、り、と、云、ま、り、く、つ、出、る、と、す、め、尋、け、ま、し、傳、七
り、て、参、ん、と、云、ま、り、く、武、人、三、守、の、折、物、行、の、ひ、て、茂、氏、の、
め、首、を、つ、け、く、手、の、肩、先、と、切、く、放、す、是、の、命、も、と、す、て

ち、ま、り、と、ま、り、あ、つ、め、を、折、り、ま、り、と、折、た、れ、と、三、階、の、行、る
ま、り、養、ひ、ま、り、と、ま、り、て、を、け、り、と、切、あ、て、り、と、す、り、如、く、傳、七、高
殿、を、す、ん、と、切、く、と、め、り、と、く、残、の、身、徒、等、も、と、ま、り、の、く、と、
切、く、切、る、高、屋、の、ま、り、の、ま、り、と、ま、り、升、ら、う、と、切、換、り、事、行、の、奴
ら、と、討、れ、て、入、替、り、程、ま、り、人、因、物、の、外、ま、り、と、傳、七、今、の、早、衆、也
ま、り、の、れ、と、殺、て、何、ら、ま、り、と、事、入、は、と、走、り、あ、り、て、膝、下、入
ま、り、切、く、ま、り、と、り、り、る、人、因、人、大、晴、の、り、剛、強、の、兵、殺、り、け、る
ゆ、我、一、人、當、千、と、い、も、と、こ、そ、ま、り、と、と、傳、り、め、人、い、あ、り、り
長慶、も、大、り、参、り、と、横、子、と、い、り、て、當、物、と、宣、り、ま、り、け、り、と、
龜、ね、三、十、命、退、き、
因、村、に、参、り、三、十、命、當、物、の、り、れ、と、有、り、と、傳、七、命、り、其、の
極、と、因、り、所、詮、行、時、と、是、と、有、り、と、更、と、ね、く、何、ら、ま、り、濃

久し遠き親類の有るを尋ねたりしうんばあり
はらやと云ひてまゝいりて出たれは長しうひて後
三百廿分りたるは程情の上志難きものあり
向く一慮恩謝すへて出たり

室町殿日記卷第九終

室町殿日記卷第九

義輝公御返書之事

昨日今日と、公へとも移り安らぐ光陰とて、光源院義輝
公の一日忘しと成ぬまて、武田殿へ山川の殺生とて、
同禁部一教の御僧と請へ、修く一日一夜の経とて、
義輝公へ姫君出離生死願證を奉り、廻向とて、
うそ喜介れ等侍院へ僧細敷多寄給ひて、
同極の御帛有る、鹿苑院殿へ、
より重恩蒙り、諸代相傳り、
香花と御廻向奉り、
そ有る

仁孝右京大夫今里城退り



長慶入道家老を呼んで申されきりの仁木右京亮の武
命に依て當由より外國人等と諾らひ義長と云うべしの結
講を然るも方已餘の何と指して今と有らん意
勢と先はつり一版印をて城と攻めて申されきりて
右京亮と催しつるや右京亮を國をいとはくしき事
の意と申されきりて某一日は城に有りける義昭を
兼光とわたりて一版印の催も有りけるものさう
れば若
左衛門のちつひもあつて安見直政と味方とて當城へ
入奉らんと思ひつるも今または延引せしや取詮
たうぬのちあつて城と隔りて退きしはあつて
十月十七日の夜とて今里の城と出ぬの京は
宿所へ入つて見ゆへに五十計の男唯一人長
うり右京亮兼

子の事と尋給へども人非北の方若連也
比きて津左有
しつと云儀のあつたは儀と
乳母の在所へ思ひ下り給て兼中
仁木同馬ひく
御の小橋より有らん
と尋下り給ひて
と同給ふ行くとある
乳母より合ぬ
ををぬひく
面申す
相傳の旧臣等
かして今里の
勢馬とて安見
者罷出んとて
よ付らうと云

杉永へ仰せ申し日本一の不受者哉 郡々物伝す者下と
ありし事一たりし事下知されし事

永禄七年

永原堂波守助月一境と染井

今度の六月より七月迄は田沼海とて多し
守要害へ水色よ込入し危く人殺し出し此の森南北へ
十町の間堤とて築せたるも一町の要害のありし事
念入りと積り指さるる事行へ陣正もく固く或時
行へ此の積りとて一町とて築けり此の森南北へ
くは城と築きし事一町とて築けり此の森南北へ
人等退治せん事一町とて築けり此の森南北へ
都々ともなる

河川向に至り婦人たは是より一城とて此を申作別善請

ハ仍く未定頼はる永原を波守とて者ヲ城代ニ入置申
依此所ハ東北ノ端へ相勘申に書度通り之是也ノ事依
同ともい要害ヲ攻取惟而自此方持可申作し存保間人
殺二千計早く沖登せ可有く依此の積り此の森南北へ

七月廿九日

久秀

永原堂

長慶入道指しして家老とて集々人殺しはつて人々
いふ事有る点檢して人々へいふ事有る各集々ハ御守
て武平の余作りんとし人々へいふ事有る各集々ハ御守
右是ももあつて國人の中とて一備りんとしハ一戦はの候
ありし事申されたる事とて催したる事とて御守

杉永守要害へ此の攻可被申しはる人殺可被申中彼申

比尋常より、加増申付、倍も二千八百と云く、一十七百餘指也
を申付、之返に戦ひるゝれ、付、戦、人、具、無、計、又、不、可、計、也、と

八月二日

義長

相承陣正取

加増行方、上流より、河、邊、中、方、より、馬、の、十、七、と、鴨、川、
鴨、川、より、約、一、百、日、の、程、に、た、り、た、り、の、間、に、向、つ、た、り、た、り、と、
は、加、増、の、使、者、と、違、つ、て、各、を、東、宮、へ、集、め、つ、つ、行、つ、た、り、た、り、と、
唐、兵、ら、に、評、し、て、沖、後、へ、つ、つ、移、り、た、り、た、り、と、
な、し、い、何、程、の、人、數、と、率、と、を、先、川、邊、へ、先、出、し、
て、鴨、取、城、ら、つ、つ、寄、り、た、り、た、り、と、
て、い、つ、た、り、た、り、と、六月、七、月、照、法、と、つ、つ、水、鏡、と、つ、つ、
と、あ、つ、た、り、た、り、と、一、陳、二、陳、の、身、の、圍、に、相、違、つ、

半、より、出、陣、有、り、若、夜、討、り、や、寄、り、た、り、と、申、し、た、り、た、り、
各、心、と、同、つ、つ、座、敷、と、違、敷、と、つ、つ、相、承、陣、の、間、に、
と、入、陣、と、つ、つ、つ、つ、と、つ、つ、と、つ、つ、と、つ、つ、と、
の、間、に、成、り、た、り、た、り、と、つ、つ、と、つ、つ、と、つ、つ、と、
川、東、を、ま、是、二、三、百、サ、チ、り、て、山、石、と、拾、ひ、鋤、鋤、と、寄、り、
と、つ、つ、と、つ、つ、と、つ、つ、と、つ、つ、と、つ、つ、と、
申、初、の、敵、と、同、心、と、用、意、と、つ、つ、と、つ、つ、と、
中、へ、向、つ、つ、利、の、つ、つ、と、評、議、と、つ、つ、と、つ、つ、と、
十、日、計、を、つ、つ、と、つ、つ、と、つ、つ、と、つ、つ、と、
定、つ、つ、出、陣、と、つ、つ、と、つ、つ、と、つ、つ、と、つ、つ、と、
寄、り、た、り、た、り、と、つ、つ、と、つ、つ、と、つ、つ、と、つ、つ、と、
と、や、有、り、た、り、た、り、と、つ、つ、と、つ、つ、と、つ、つ、と、

をきて可憐とて評議して各々入られきまて列三首の十名
けるるれと能く文とまてまて常々海城とわたりて居る
要害とて身とをわり

駒形是九郎 手柄

横津のまの作人、駒形是九郎先親或時若侍十人計、
お多進之庵の跡より、終日むらびき、十河一宿、
婦より河原より、御理をまて、二男七つ、ま本人五十計、
寺より飯りけり、通て、草津、信と通て、
大草の原とのど、廻り、
よやちよ、吹く、
けり、
けるも、

のく、
たり三町、
入く、
同く、
ちも、
作、
知と、
よて、
この、
と、
す、
よ、

見直政と退治し、其内と望めて其後大敵の有無と究は
やとふ事なく、即合二千の人数と卒して直政の要害(御軍
と行)直政王巢太島より入書物とけりりりり

一書令智と作仍今朝未明に荒宗入道人教二千斗
る當敵ヲ取圍申儀何夜如約議明朝此表(後
謀、向し作て其島岸城中より合はし一戦中勝
有る見可し作はしむく致さる方々へ(湯道)合は
可論作斤時と合ゆり頼る作

卯月七日

王巢太島御殿

王巢おくり返札云

御札令拜見作然者今朝三好入道と表へ致向し申

直政

行作因作御書付し返者、早速相成可申作同
定而明朝とも表へ出陣する作まこと何と後
城より退つて防作の夜は行つ御明し可有と作明朝必
可罷出儀

長政

長政

神保町列

とまゝ入道南北へお廻りし城の傍様と見ゆり其内九二百
斗の埋草と運せ城と一時、埋んと汗水と成り運ひ
る赤沢大和守と卒し、下をてり湯池と透向ありせ
り行くくくをくれと表し楠とつとつと若可人斗
進もくく、楠の枝と微塵く、折碑(クダカ)城の障りむれり
頭もあびず唯死人のくくく、見たりけり、夜に入てをれ

家重代の者去り、作へく御説意と云く、義長方より、上人香
作代宿沙佐人等と押置夜討り、させ作りし時、在慶を
服して百代えらり、く、打果す、と人形をつり、作り
し時、其見直殿より、向ひ、飛命と戦作り、運領さ、義
長、作りて、つり、勝利を得作り、存す、や、一同、申
され、これ、あ、方、実り、と、存、く、存、角、く、計、ひ、給、へ、と、作
ら、れ、る、義、く、御、領、所、の、代、官、り、と、人、物、と、つ、り、い、れ、る、
徳、御、上、意、一、札、見、遣、作、然、と、申、新、安、申、交、り、い、れ、
十七ヶ所、あ、ら、方、重、代、之、御、領、所、百、代、以、當、同、前、後、
悪、逆、無、道、く、長、慶、入、道、主、君、討、り、御、領、り、集、上、
凡、の、徳、り、十、指、舞、の、り、不、義、飛、下、百、代、等、相、隨、中、一、偏、
時、権、忍、り、故、や、徳、文、進、百、代、等、へ、檢、使、可、被、遣、り、

百代等の重見観下知、隨所之長慶の代官沙佐人等
討可討果来、具用意と云、下方より作り、一札被指遣い
八月七日
長秋
上

十七ヶ所百代中、
長進

而く、一和唐等、勝り、寄合、く、拜見、し、む、ま、後、の、作、り、
内、百、代、中、も、も、慶、く、相、隨、中、一、指、舞、存、作、り、し、時、
而、く、是、他、と、夫、の、り、作、り、と、衆、上、六、流、換、り、る、向、り、と、御
講、と、行、り、ん、と、て、唐、唐、片、集、り、て、一、札、と、持、り、り、

八月八日
法々座主
宗入

橋村七郎重忠殿
森田三郎重忠殿
新右衛門
山内三郎
長秋
上

勘
久善

服屋主斗頭加待善兵衛と御檢使として三浦の十相係
潜^{カクレ}に候侍をへそ下りける一和唐かりりて宿りて夜行相
定日の暮と相めりて行くとて、代官林の宿に宿りて
所へ押寄、三方より飯巻垣壁とて、つとてわく、折
裏表より丸入りて、舟に上りて、盗賊の入りて
さひらぬく、射つるも、寄り来ると、廿日押込け
り、若衆中向十人、切つて、大層の事、飯巻一人
も不談計、さうり、あつて、力あつて、夫程は、れと、事、入
て、戸とて、服、さう切つて、さうり、る、服、加待、さうり、も
の、思、藤、さう、宿、所、の、相、寄、火、さう、け、り、れ、か、ま、事、決

持く走り出何者なりと、石、さう、人、二、三、度、匂、り、れ、を
和久、新、八、郎、十、文字、と、持、く、す、と、出、業、思、よ、り、の、あ、暫
戦、藤、兵、衛、さう、午、の、向、す、と、さう、の、つ、つ、り、て、ひ、心、丸
と、押、つ、り、頭、の、さ、切、つ、出、さ、り、外、の、兵、凡、痛、手、落、り
有、さ、り、の、徳、大、田、方、の、押、つ、も、と、飛、火、煙、と、成、り、失、り、け、り
加、待、服、屋、さう、と、出、て、ゆ、法、人、川、口、中、の、船、の、宿、所、の、押、寄
も、も、三、方、より、飯、巻、垣、壁、と、折、り、丸、入、り、中、の、船、の、何、者、さ
う、強、盗、か、り、る、あ、り、と、さう、れ、と、三、方、の、行、親、す、と、出
て、後、ね、ま、り、と、れ、と、さう、と、押、つ、け、り、と、射、つ、り、と、い、い
つ、と、有、さ、り、の、火、の、光、り、と、事、件、と、さう、け、り、と、さう、の、引、て
ひ、と、射、つ、り、と、行、親、運、つ、と、後、ね、の、中、つ、と、射、つ、り、と、い、い、け、り
と、射、つ、り、と、後、ね、の、折、り、と、折、り、後、ね、の、切、り、と、い、い、け、り、と、い、い、け、り

高腕たかうでとそをささるるに倒るる所と首とを向く出たり
のりて時刻うりりて夜をこし、眼をりんめくさく、
とて首をもあつを服屋加持ハのりての宿所へゆり海野
角を又又下野守兩人ハのりてまもるるに、
門か侍ハ小七郎と名者ゆん、
のりりて、
今宵兼ハ、
妻子と國方へ潜り送り、
あつとあつと、
備へ何時と、
つふ者も、
とほやく、

何と成りて、
たて巻りける、
三百余人、
侍もあつ、
切るとあ、
田舎へ、
下知して、
陽り、
後、
手も、
持も、

如く刀祿の種永 林田新多と初とて七八人僅の種、取
付く引まじりあをれと力あつめとてせりあまける直政の
身等とての千余騎目とてけて馳着けまを五百の軍勢押つ
るに終り力あつて引くゆゑ直政安見勝園と出と揚と討
取預とて武百七十余とて記けるあま京邸へ洋進申けり
義昭公御感賜りたりとて二人一感状とて被下けり

室町殿日記 卷第十二

織田上総今へ使れり事

義昭公 京都より移らるを給ひ、武將のあ督より備らるを給てハ
申せし、尊氏より代々積置給ひし和漢の珍器、武具の類
皆々長考より為り一時は炎滅とてしり萬年よりたゞ不恒る
事とてあり、御領がハ僅たりとてこの奉り役人抱給り
人の思ひし、わらうり、ゆゑ具のとり、のりて有り、ひたりた方の上
哉と萬のいれをを給ひたり、或時、同長等と集給ひて、四族
合の事有と信長へ使れと被遣、是ハ萬年の道具より付て
女流、金力有とて、百条、おと、奉り、松原と、ゆ、使者より、尾張
へ下りてを給ひ、やうて、是と、入られ、上総、今、給ひ、く、も、より
返事、可、申、し、く、惟、と、て、對、面、し、不、能、御、使、者、と、返、され、り

よの位官より不足はまゝに云婦の更とちまゝにして禁
中の中政概りのしを給りてあんなに法坐のたふ小石と迫
付、武具馬具等と所望し給ひてくく人ともせ給ふ事と
意のこゝ向は有る事と申す、こゝに然とも甲辰武田
信吉、信長中免くして色く甲信勢上洛候と風聞れ
くよ編み義昭云へ兩將の間と申す業まゝして事ある
柄よをを給ひ候と望給ひてんて、よ方御之版の
帝をれく且て取奉給ひて、意角の沖返事ありきり

よ方御謀殺し事

義昭云思合々々のハ不詮はよ編みとてまゝハよ方の家ハま
ゝと思ひ取給ひて、江兵常頼入道、浅井備前守ありと
わくゝい給ひ、よ方時々同心して何時成とも、沖出陣したるは

よ方へ飛肝と給ひて、加勢と侍らんと、まゝ義昭云、ゆ心つゝ
あを給ひて、沖領の人数、并京智加、て、野千斗、て、那と
まを給ひ、山田左衛門、志賀、廣崎、比良、小松、和余、行田、かとの、頼
船、取寄、救、百艘、て、打、余、已、よ、あ、ま、へ、脅、向、て、因、信、長、勢、
給ひ、志、不、忠、ハ、も、あ、ん、今、白、は、比、の、よ、方、の、四、身、と、し
て、信、長、と、共、り、を、給、ひ、ん、事、ハ、端、娘、の、弁、り、ん、陸、然、信、
本、浅、井、あ、り、手、合、と、は、あ、ん、山、信、伸、と、も、加、り、事、有、る、ん
多、勢、付、て、ハ、叶、ふ、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、三、萬、余
し、て、馳、り、給、ひ、都、々、と、既、ら、し、あ、も、い、方、へ、こゝ、く、
は、う、を、義、昭、と、も、那、へ、移、先、敵、軍、國、と、頼、多、付、置、飯、給、
ら、は、な、ゆ、陣、と、備、素、す、ま、ま、ま、ま、ま、ま、置、か、ハ
事、出、世、の、妨、あ、ん、と、い、環、へ、下、て、武、寺、よ、追、電、奉、書

たらしまると同詩の御物係有るより三日逗留有て伊勢迄
出られり

室町殿中御下向事 是ハ秀吉公は世の中也

義昭公都下たりしより此ハ照高院殿は舊沼巴別而此
志浅くは詩無句初動連秋の如くは且暮伊茶と離
隔ハより今ハ沼巴も秀吉公の御前より居る者ハ心
ハ義昭公の御事御事なりと思ひ出されしと云々
はつゝ明城陽より居てはるるを親王の御事と表
し御成奉り度と申せりハ秀吉公もつゝとせり
流石天下の大將軍とて新代相續の嫡係なれはるるの成
し申付が事と思有し思ふはつゝ居る角の御計ありし
有時沼巴と云々被仰るハ義昭公と誰の馳走せん

業はくられし尋常の大名ハいづり有る一耶詮毛利輝
元こそ名譽累代より當時争奴の大名なれはるるハ
らふ人として仰られし沼巴不斜奉候と云れはるる大慶
せん被仰けれはるる藤原中納言ハ伊保れはるる
も方と移し奉りて給へは輝元累々請待はるる極と褒
唐たりしとて備後守の深津ハ御所と遠り五千石の如し
けりを給へ奉りて悦給ひて誠々今こそ身上の安堵ハ
し給ふらぬはるる田舎より幸淋はるる暮るる人
として秘苑ハ心合はるる御所と義昭公ハ奉りて方秀吉
の志の程はるる難ふと思はけるのりて藤原の御依
て伊領國の伊保依寺の諸長先諸面堂も方の御依
替り奉りて給へ奉りて明暮の御遊ハ詩無句の命と云々

〜多信と送給ひけり

室町殿日記卷第廿二回書

信長座奥深事

或年の正月五日常振舞有へ〜信長任例了任を諸候
と集酒宴有る〜夜に入大宴〜下り〜
給〜
大所の盡〜信長〜今〜光秀〜
作〜一息〜吞り〜
き〜
〜給られ作〜
申〜
ハ被申〜
虎と蒙らん〜

これ作新のハ四所大明神庶護のまゝなりと云々〜は度の凶徒
と退けけたりませし一命抱く且誠盡了祈しつゝ幸成範の
瑞相巨表度も見ゆまゝなりかて漸く空も晴れはさ〜ハ寄
よきて諸勢折さ作川のころこの川端ハ旗と立く陣とい
ふてより高野は作ハ僅三百余人川向ひハ楯と突る〜てり
法施と射り相山ハ陣向とせんれ〜野ハ山も雲雲度如
く人殺殺陣とさる〜と云云〜と云云〜と云云〜と云云〜
こハ〜と云云〜と云云〜と云云〜と云云〜と云云〜
方ハ〜と云云〜と云云〜と云云〜と云云〜と云云〜
ゆ〜と云云〜と云云〜と云云〜と云云〜と云云〜
之陣の大將もと〜と云云〜と云云〜と云云〜と云云〜
も〜と云云〜と云云〜と云云〜と云云〜と云云〜

ま〜と云云〜と云云〜と云云〜と云云〜と云云〜
す〜と云云〜と云云〜と云云〜と云云〜と云云〜
こ〜と云云〜と云云〜と云云〜と云云〜と云云〜
川〜と云云〜と云云〜と云云〜と云云〜と云云〜
中〜と云云〜と云云〜と云云〜と云云〜と云云〜
一〜と云云〜と云云〜と云云〜と云云〜と云云〜
か〜と云云〜と云云〜と云云〜と云云〜と云云〜
一〜と云云〜と云云〜と云云〜と云云〜と云云〜
か〜と云云〜と云云〜と云云〜と云云〜と云云〜
ら〜と云云〜と云云〜と云云〜と云云〜と云云〜
高野は作ハ僅千人〜と云云〜と云云〜と云云〜
是全地の利なり〜

へ形柄と違ひ五山の中より何れか廣文の僧と名を越さるる
御座りてよきれり乃法を先命有りと此も待寺と
蘇西堂と因へハ文光廣太の活僧なる因へ有るれハ撰出
る後屋へ下り乃大同中對面有る遠路の後海誠ふ若
の由念此に傳出され御舟船國のく被作付朝鮮へて傳
給ふ也大明朝鮮方より様々の事書送りたりと和傳直
て右後屋へ送り里朝鮮へハ大同と云々と云く返事と
しり大明朝鮮の文者に大々稱羨して孔孟も面と触
活佛よこもて書けり枝桑國も何れ佛の有る者感
のく大明より是と出世するへて則天子乃行香と九條
聖御書切り勅筆して本光大作と溢て如長徳と加て奉
とらる則秀言とへ何れもこれと云く倫すも此共我も

の面自奉朝の威光屋角の感愧ツヨク及まへて作れきり

從茲会及秀言とへ大和進と云

輝え思召きりハ新禮と造り大因へ奉りてと云けり
尋常してハ真もなり弘中にて萬事相柄と造をり
とて七十間横四十間以内御成同對面所客殿常の同坪の四前
我も色く草と植りて廣間墨飯所遠侍と造りて以
り方銅の門二階矢倉ハ浴池大筒付りてあり
二階三階の高欄ハ綾錦と云けりの幕沖吹風よりなり杭
柱櫓のい挿と云けり言信通判推量へて破風は那
金の夕日映り十方へ光明のやと杭ハ傳國玄宗皇帝ノ龍頭
鬚毎骨ともこの行ふハ何れも人因者押多とて耳目と
能馬來為粟屋とハ毛利家の海賊

